庄内大豆通信

第　4　号
令和7年8月20日

庄内総合支庁農業技術普及課　TEL: 0235-64-2103　FAX: 0235-64-2104

適期防除と雑草対策で品質・収量を確保！

マメシンクイガ・紫斑病は大豆の収量・品質に影響を及ぼすため、適期に薬剤防除を行いましょう。また、刈取りに向けて除草を行い、大豆の品質向上を図りましょう。

1 マメシンクイガ

防除適期　**1回目**　**8月25日頃**
2回目　**9月　5日頃　（1回目の10日後）**

◆日長に反応して成虫の発生時期が決まり、8月下旬～9月上旬に産卵盛期となる。ふ化幼虫の侵入を防ぐために**8月下旬（8月25日頃）及び9月上旬（前回散布10日後）の2回防除を基本とする**。
◆**連作圃場や前年被害の見られた圃場では、生息密度が高くなる傾向がある**ため、必ず2回薬剤防除を行う。

マメシンクイガの食害

2 紫斑病

防除適期　**開花期25日後～35日後**

◆開花期から40日程度が感染時期で、気温が25°C以上・多湿条件で感染しやすい。
◆**マメシンクイガと同時防除の場合は、マメシンクイガの1回目防除の時期に合わせる**。

紫斑病の被害粒

⇒マメシンクイガ、紫斑病の薬剤は莢まで付着するよう丁寧に散布する。

3　残草処理

◆**残草は、子実肥大の阻害、汚損粒の発生を招く**。雑草が種子を付ける前に圃場から取り除くことで、次年度の圃場内の雑草種子密度を抑えることにもつながる。
◆登録が「雑草茎葉散布」となっている除草剤は、大豆の茎葉にかからないように散布する。

⇒残草の大型化を防ぐとともに、収穫直前に雑草の抜き取りをする手間が省けます。

雑草が大型化した圃場

4 その他の病害虫防除

【ダイズシストセンチュウ】

◆通常７月中旬以降に、大豆の生育が停止し草丈が低く、茎葉が黄変する。密度の高い圃場では根粒が激減し、収量も大きく減少する。
◆機械や長靴に卵を含んだ土壌が付着して他の圃場に伝播する。**防除・刈取りなどで発生圃場に入る場合は一番最後に入り、機械や長靴は洗浄する**。
◆次年度に持ち越す卵の数を減らすため、被害株が少ない場合は早めに抜き取り圃場外に搬出する。

ﾀﾞｲｽﾞｼｽﾄｾﾝﾁｭｳによる被害

【ハスモンヨトウ】

◆台風や低気圧の通過に伴い多数飛来することがあり、多くの作物を加害する。葉の食害が減収に繋がる。
◆幼虫は、齢期が進むほど薬剤防除の効果が劣るため、**早期発見につとめ、若齢幼虫時に防除する**。

ハスモンヨトウの幼虫

【ウコンノメイガ】

◆年２回発生する。葉が巻いており、開くと透明がかったアオムシが入っている。幼虫は１～数枚の葉を縦長の円筒状に巻き込み、糸で綴り合せ、中で蛹化する。
◆トレボン乳剤を用いると、マメシンクイガと同時に防除できる。
◆合成ピレスロイド剤は抵抗性害虫出現防止のため、総使用回数を2回以内にする。

ウコンノメイガによる葉巻

【マメハンミョウ】

◆成虫は、雄11～14㎜、雌14～19㎜の細長い甲虫。群生して大豆の葉を食害する。体液には毒があり、皮膚につくと水ぶくれができて火傷のような症状を起こすので、触らないよう注意する。
◆防除する場合はマラソン粉剤3を使用する。

食害するマメハンミョウ

⇒農薬使用の際は、ラベルをよく確認し、適切に使用しましょう。

熱中症を予防しましょう！

暑い日はこまめに休憩・水分補給！